

Kontyû, Tokyo, 42(2): 206-207. June 25, 1974

礼文島でみられたアザミを食する *Epilachna* について

山崎 柄根

埼玉大学教育学部生物学研究室

Tsukané YAMASAKI: An *Epilachna* Lady Beetle Feeding on a Thistle in Rebun-tô Island

Synopsis A population of *Epilachna* feeding *Cirsium kamtschaticum* was discovered in Rebun-tô Island lying off the northernmost part of Hokkaido. This population shows wide variation in elytral and femoral blackish markings: some individuals are similar to the "Sapporo form" of the *pustulosa* group and typical "Tokyo west suburbs form", while others are represented by Rishiri (or continental) form of *E. vigintioctomaculata* and by intermediate ones between these.

利尻島および礼文島の *Epilachna* 属テントウについては、片倉 (1973) による報告がすでにある。それによれば、両島産のものは北海道型というより本州型に酷似したオオニジュウヤホシテントウ *E. vigintioctomaculata* であり、その食草は利尻島より採集された個体ではジャガイモであった (礼文島のものについては不明)。

さて筆者は、1973年8月、利尻経由で礼文島を訪れ、28・29の両日、同島最南端の小漁村知床の、海岸から丘陵へ上るちょうど境界付近のオープンな環境に生育していたエゾアザミ *Cirsium kamtschaticum* から多数の *Epilachna* を得た。それらはアザミの葉を食し、またいくつかの対はその葉上で交尾しているのが観察された。

このうちには、片倉の述べた利尻島のオオニジュウヤホシと同じ型と思われるものも見られたが、また一方で東京西郊型 *Epilachna* に近いものもかなりあった。試みに採集した48個体について検討してみたところ以下のような結果になった。

結 果

- 1) いわゆる *pustulosa* 群に属する札幌型コブオオニジュウヤホシテントウ¹⁾に近い斑紋をもつもの (ただし腿節の色彩は褐色がかりオオニジュウヤホシと変りがない)……………6例 (12.5%)。
 - 2) 典型的な東京西郊型 *Epilachna* に近いもの (第1紋と第4紋²⁾の形、後肢の色彩がよく一致する)……………4例 (8.3%)。
 - 3) 上記2とほぼ同様であるが第4紋がやや東京西郊型からはずれるもの……………3例 (6.3%)。
 - 4) 東京西郊型に近いが、後腿節の黒色部が弱くなっているもの……………13例 (27.1%)。
 - 5) 利尻島のオオニジュウヤホシと同じ型のもの……………22例 (45.8%)
- (これらのうち沿海州方面の典型的オオニジュウヤホシと同型と思われるものが4例ほど含まれるが、片倉も述べているように、これらの個体は大陸産のものと十分に比較検討する必要がある)。

1) この札幌型コブの後肢は腿節から脛節まで明らかに黒く、また前胸背もほとんど黒色である。
2) 紋の番号については、たとえば福田 (1970) (昆虫, 38, p. 349) を参照されたい。

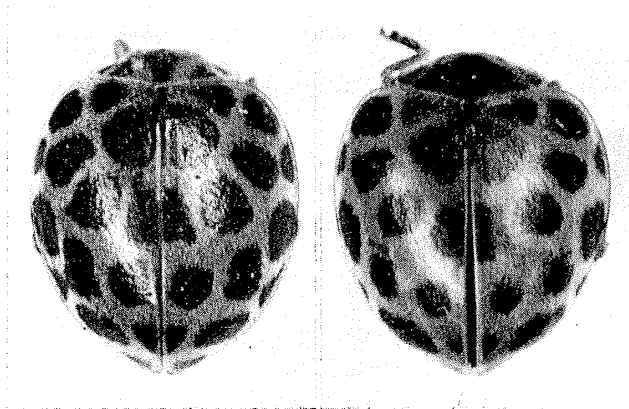


図1 礼文島知床産 *Epilachna*. ——左, 東京西郊型に近いもの. ——右, 札幌型コブに近いもの.

考 察

コブと称される *pustulosa* 群はともかくとして, これまでアザミから採集されたオオニジュウヤホシテントウの例はいくつかあるものの (小山, 1952; 小野・安富, 1952), それらはいずれも付近のジャガイモ畑にみられるものと差がなかった. しかし, 今回エゾアザミを食していたものは, 上の分析からもわかるように少なくとも斑紋や腿節の色彩などからみると変化があって, 結論的にこの礼文島知床の個体群は, 利尻島産 (または大陸産) オオニジュウヤホシと東京西郊型 *Epilachna* および札幌型コブオオニジュウヤホシなどの特徴をまぜたような個体群といえる. 同一個所の個体群でありながらこのように変異の幅のきわめて大きいこと, そして食草がエゾアザミであったことは, ともに注目し得る.

こうした個体群がどのようにして生じたかという問題は, 食性実験とともに今後に残された興味ある課題である.

本文を草するにあたり, 種々助言を与えられた国立予防衛生研究所安富和男博士に感謝の意を表す.

参 考 文 献

- 片倉晴雄, 1973. 北海道の *Epilachna* 属テントウ 2 種の分布と型についての新知見. 昆虫, 41: 234-237.
 小山長雄, 1952. オオニジュウヤホシテントウの実験ノートから. 新昆虫, 5(9): 39.
 小野 決・安富和男, 1952. 北海道帯広におけるエゾアザミを食するオ (オ) ニジュウ (ヤ) ホシ. 新昆虫, 5(11): 39.